



Title	フィジーにおけるヒンディー語と文学活動
Author(s)	長崎, 広子
Citation	印度民俗研究. 2026, 24, p. 145-166
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104693
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フィジーにおけるヒンディー語と文学活動

長崎 広子

世界各地の都市にはインド料理店があり、店の従業員や客がヒンディー語を話し、日本の家電量販店では店内アナウンスがヒンディー語で流れることもある。こうした現象は、人口増加と経済成長を背景にインド人の海外渡航が増加したことに起因し、インド国外におけるヒンディー語使用の広がりを示している。

インド憲法は、デーヴァナーガリー文字によるヒンディー語をインドの連邦公用語と定めている。イギリス植民地支配の置き土産であり、現在もビジネスや教育の分野で高いプレゼンスをもつ英語は、憲法上はヒンディー語と並ぶ連邦公用語とされてはいるが、その位置づけはあくまで期間限定のものである。

インド憲法は国語を規定していない。広大な国土を有する多民族・多言語国家であるインドでは、言語はそれぞれの話者や民族のアイデンティティと深く関わる問題である。連邦公用語をめぐるのは、非ヒンディー語圏からの反発への配慮から、英語が暫定的な連邦公用語とされた。また、憲法附則では現在 22 の言語が準公用語として定められている。さらに、憲法上の規定とは別に、州ごとに公用語が定められ、地域ごとの言語政策が運用されている。これはねじれ現象というよりも、複雑な言語状況に即した柔軟かつ実用的な方策と評価すべきであろう。インドでは、生活や教育、仕事の場面で複数の言語を使い分けることが一般的であり、母語でなくとも第二言語、第三言語としてヒンディー語を理解する人はきわめて多い。このように、およそインド全土で通用し、国内の諸言語のなかで唯一憲法において連邦公用語と明示されているヒンディー語は、この国を代表する言語である。

2023 年にインドの人口は世界第一位となった。それに伴いヒンディー語話者数も増加している。インド国内の母語話者は 5 億人近く、あるいはそれを超えるというデータもある。世界の話者人口では、統計の取り方にもよるが、中国語、英語、スペイン語に次いで第 4 位、または第 3 位に位置づけられることもある。近年、アメリカをはじめとする諸国でインド系移民が増加しており、ディアスポラとしてのヒンディー語話者層が形成されている。また、陸続きの南アジア諸国では、たとえばネパールにおいてヒンディー語を理解する人がきわめて多い。さらに、パキスタンの国語であるウルドゥー語は、文字体系や高級語彙を除けば言語構造的にヒンディ

一語と近接しているため、ウルドゥー語話者（パキスタンよりもインドにより多くの話者人口が存在する）は、日常会話レベルではヒンディー語を相当程度理解することができる。さらに、19世紀後半に契約労働者としてインドから移住した人々の子孫が暮らす地域、すなわちモーリシャス、トリニダード・トバゴ、フィジー、アフリカ諸地域では、現在もヒンディー語が多様なかたちで使用されている。スワヒリ語の語彙にヒンディー語からの借用が確認されることも、インド洋を介した歴史的接触を示す一例である¹。「インド洋の真珠」と呼ばれるモーリシャスについては、インドの第6学年用ヒンディー語教科書 *मल्लार* で詩人ディンカルदिङ्करの旅行記が掲載されている。ディンカルは同旅行記の中で、モーリシャスでは中華系住民であってもヒンディー語を話していると記している²。ちなみに、同国では教育制度上、主たる東洋語としてヒンディー語が位置づけられ、国家試験の科目にも含まれている。

このように、南アジアの諸国やモーリシャスではヒンディー語が日常的に用いられているのだが、ヒンディー語に対する国としての位置づけや憲法上の規定は存在しない。これを前提に考えると、フィジーはきわめて例外的な位置にある。フィジーでは英語およびフィジー語と並んで、ヒンディー語が国の公用語として明確に定められているからである。世界でヒンディー語を公用語としている国は、本国インドとフィジーの二か国にすぎない。英語やスペイン語、フランス語が世界各地で国語あるいは公用語として用いられるのと同様に、太平洋の島国フィジーにおいてもヒンディー語が通用し、それがフィジーの憲法で公用語という正式な地位の付与にまで進んでいることは注目に値する。

本稿は、短期滞在中（2025年夏）に筆者が直接観察した事例をもとに、フィジー・ヒンディー語の語りの一例を紹介し、その言語的特徴について

¹ Nobuko Yoneda, “Traces of Indian Ocean Trade in the Swahili Language” In Hiroko Nagasaki, So Yamane, Yutaka Kawasaki (eds.), *Currents of Metamorphosis across the Indian Ocean*, Kyoto and Vizianagaram: Kotoba Books, 2025, pp. 3-18.

² *मल्लार*, New Delhi: राष्ट्रीय शैक्षिक अनुसंधान और प्रशिक्षण परिषद (National Council of Educational Research and Training), 2024, pp. 128-132. オンラインでも公開されている: <https://ncert.nic.in/textbook.php?fhml1=12-13>.

若干の考察を行うものである。移民研究やフィジー研究を専門とする者ではないが、フィジー・ヒンディー語との出会いは、長年インドのヒンディー文学を研究してきた筆者にとって、きわめて新鮮な体験であった。そこで見聞きした事象が、日本ではこれまでほとんど報告されてこなかったことを踏まえ、フィジーにおけるヒンディー語使用と文学活動の現状を紹介する目的で、今回の現地調査の内容を報告する。

標準ヒンディー語とフィジー・ヒンディー語

世界各地で初学者向けに教授・学習されているのは、モダン・スタンダード・ヒンディーと呼ばれる現代標準ヒンディー語である。英領インドからの独立運動期にあたる 20 世紀初頭、ヒンディー語は北インドにおける教育言語として位置づけられ、教科書が編纂され、文法と文体が体系的に規範化されてきた。インドでは多くの人々がヒンディー語を使用し、そこには方言や破格の文法などを含む柔軟で包括的なヒンディー語の世界が展開されている。しかし、外国人学習者がまず学ぶのは、教育用に規範化された標準ヒンディー語である。語彙に関してはウルドゥー語と共通するものも少なくないが、標準ヒンディー語ではサンスクリット由来の語彙が中心的な位置を占めている³。日本語で書かれた文法書であっても英語で書かれたものであっても、記述される文法体系に本質的な違いはない。教科書によっては、サンスクリット由来の ナマスデ や ナマスカル といった一般的な挨拶のみが紹介され、イスラーム教徒に対する挨拶が扱われない場合もあるなど、語彙の選択に違いがみられる。こうした違いは、タトサマ語やタドバヴァ語といったサンスクリット系の伝統的語彙に加えて、ペルシア・アラビア語系の外来語をどの程度取り入れるかという点にも関

³ Orsini (2002) はムガル帝国期に北インドで繁栄したペルシア・アラビア語文学の語彙は 20 世紀初頭までのヒンディー語では包括的に用いられていたが、それを外来語として排除し、よりヒンドゥー文化を反映するサンスクリット系の語彙が選択された時代 1920-1940 年を論じている。Orsini が論じた時代（独立運動期）とは異なり、今日ではウルドゥー語と共通する語彙は一般に会話でも使用され、文学作品でも使用されている。特にヒンディー映画を代表するボリウッド映画ではウルドゥー語の語彙が多い。

わる。たとえば「本」を表す語として、サンスクリット系の プスタク(पुस्तक)に加え、ペルシア・アラビア語系の キターブ(کتاب) は、ほとんどの教科書で採用されている。このように、ヒンディー語にはすでに定着したペルシア・アラビア語系語彙も多く、日常的な言語使用や大衆文化において重要な役割を果たしている。学習者の語彙は習得段階に応じて徐々に増えていくが、文法体系自体はどの教科書でも共通しており、記述の詳細さに違いがある程度である。

ちなみに外務省のサイト⁴によれば、フィジーの人口は928,784人(2024年、世界銀行)で、民族はフィジー系(57%)、インド系(38%)、その他(5%)(2007年、政府人口調査)とある。フィジーを訪れる前、フィジー・ヒンディー語がかなり強い訛りをもつため、意思疎通は困難であろうと予想していた。YouTube上で、フィジーを訪れたインド人がタクシー運転手やレストランのオーナーにヒンディー語でインタビューする動画を視聴したところ、理解しづらい表現が多く、フィジーではヒンディー語による意思疎通が難しいのではないかという懸念を抱いていた。

なお、筆者がフィジー滞在中にヒンディー語で会話を行った相手は、以下の人々である。

- ・ヒンディー語を教授する大学教員
- ・教師養成コースでヒンディー語を学ぶ大学生
- ・ヒンディー語作家
- ・タクシー運転手や町でヒンディー語を話すインド系住民

このうち、タクシー運転手との会話でのみ、フィジー・ヒンディー語を実際に聞くことができた。店舗でインド系の従業員がいた場合でも、筆者がヒンディー語で話しかけると英語で応答されることが多く、ヒンディー語が英語へと置き換わりつつあると強く感じた。

このように、フィジー・ヒンディー語の実態を網羅的に把握することはできなかったが、車での移動中に運転手が話したヒンディー語は、明らかに標準ヒンディー語ではなく、フィジー・ヒンディー語であった。相手の

⁴ https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/fiji/data.html?utm_source=chatgpt.com

発話内容を推測しながら応答する形ではあったものの、会話が途切れることなく、家族のことや祖先の移住の経緯にまで話題が及んだ。

では、フィジー・ヒンディー語とはどういう言語なのだろうか？言語的特徴については、Moag (1977) が文法をまとめている⁵。ボージプリー方言に近く、人称や性の区別や格の区別が少なくなったヒンディー語というのが筆者の印象で、ある程度推測できるが、標準ヒンディー語とはかなり異なるとも感じる⁶。ヒンディー語との類縁性でいうと、たとえばウルドゥー語は語彙面での差異を感じることはあるが、文法構造は共通しており、同一言語の変種であるという感覚がある。一方、フィジー・ヒンディー語は、語彙以上に文法体系の差異が大きく、標準ヒンディー語とは異なる言語変種として強く意識される。ちなみに現地で会った人たちにフィジー・ヒンディー語の特徴を聞いたところ、文法は「何でもあり」で、決まった形式はないとのことだった。

フィジーで教授されるヒンディー語

Fiji National University のラウトカ・キャンパスのヒンディー語研究者であるスバーシニー・ラター (सुभाषिनी लता कुमार) 氏⁷に事前に連絡をとった

⁵ Rodney A. Moag, *A Fiji Hindi – A Basic Course and Reference Grammar*, Canberra: Australian National University Press, 1977. 巻末には標準ヒンディー語との対照表があり、フィジー・ヒンディー語の特徴が分かりやすい。ほかにも Siegel による学術書と論文がよく知られている: Jeff Siegel, *Language contact in a plantation environment: a sociolinguistic history of Fiji*, Cambridge; New York: Cambridge University Press, 1987. Jeff Siegel “The development of Fiji Hindustani.” In Richard K. Barz & Jeff Siegel (eds.), *Language Transplanted: The Development of Overseas Hindi*, 1988, pp. 121–149. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

⁶ 時制・アスペクトの単純化、補助動詞の使い方のずれ、後置詞の機能の変化がフィジー・ヒンディー語の標準ヒンディー語からの違いとして挙げられる。これらは、慣れればある程度理解できるようになるだろうが、文法的にはかなり大きな違いとして感じられる。

⁷ ラター教授 (本稿では氏と呼ばせていただく) はヒンディー語での著作では कुमार (クマール) を最後につけておられるが、男子であることを示す कुमार を女性でありながら使用されている。あくまで推測だが、夫君の Khemendra Kumar 氏の Kumar を結婚後の姓として加えられたのではない

ところ、大学を公式に訪問する機会を得ることができた。ラター氏は、インドのガヤーで開催される文学フェスティバルにおいて、フィジーのヒンディー文学について講演するために招待されており、午前中に意見交換を行い、図書館を案内してくださった後に、インドへ向けて出発された。ラター氏が強調されていたのは、フィジー・ヒンディー語はヒンディー語の方言 (dialect という英単語を使用) であるという点である⁸。しかし、ボージプリーなどがヒンディー語の諸方言として言語学的に位置づけられているのに対して、フィジー・ヒンディー語はインドの制度的言語分類の枠内には含まれていない。だからといって、その国の標準言語として位置づけられるイギリス英語とアメリカ英語のように、インド・ヒンディー語とフィジー・ヒンディー語が並立しているわけでもない。

Fiji National University は総合大学であるが、ラウトカ・キャンパスは伝統的に教員養成を中心としており、筆者が見学したのは、インド系コミュニティの小学校および中学校の教員を目指す養成課程におけるヒンディー語の授業であった。ラウトカは、フィジー島西部に位置し、国際空港のあるナンディに隣接する都市で、インド系人口の多い地域である。授業には約 30 名あまりの学生（うち男子は 5 名）が対面で参加しており、さらにフィジー本島以外の島からも、オンラインで受講する学生がいた。

筆者が教室に入ると、日本からヒンディー語の授業見学に来ることが珍しいためか、学生たちは興味深そうな様子を見せていた。授業担当教員であるサリター・チャンド氏の紹介に続いて、筆者がヒンディー語で挨拶すると、学生たちの表情は一様に驚きに満ちたものへと変わった。ヒンディー文学を研究する日本の大学教員が、インド仕込みの標準ヒンディー語を話すとは、予想していなかったのだろう。

だろうか。

⁸ 2023 年 2 月 15 日から 17 日にインド政府の後援で世界ヒンディー語会議 (विश्व हिन्दी सम्मेलन) がナンディで開催されたことが、フィジーのヒンディー語話者にとって画期的な出来事であったようである。



ヒンディー語の授業の学生たち

学生たちは全員インド系であり、自己紹介の名前から当初はヒンドゥー教徒であると思われた。しかし後に、フィジーでは名前と宗教的帰属が必ずしも一致しない場合があることを知ったため、キリスト教徒が含まれていた可能性もある。なお、イスラーム教徒はいないとのことであった。フィジーではインド系住民はヒンディー語を必ず学ぶため、ヒンディー語が教職科目として必須科目となっているという⁹。とくにインド系人口の多いラウトカ周辺では、インド系コミュニティによる初等教育学校が多く存在し、これらの学校で教員として勤務するためには、標準ヒンディー語の運用能力を身につけることが求められる¹⁰。したがって、学生たちにとっ

⁹ 今回の授業ではイスラーム教徒がいなかったためこのような説明がなされたのだと思われるが、フィジーではインド系のイスラーム教徒住民は学校教育においてウルドゥー語を学ぶこともできるようである。なお、ウルドゥー語はフィジーの公用語には含まれていない。

¹⁰ ラター氏の著書(2024: 40–43)には、フィジーにおけるヒンディー語の位置づけが紹介されている。1997年憲法は英語、フィジー語、およびヒンドゥスターニー語を国家において同等の地位を有する言語として認めており(“The English, Fijian and Hindustani languages have equal status in the State.”)、この規定は2013年憲法においても基本的に維持されている。さらに教育大臣 Filipe Bole は、2014年1月22日付けで、フィジー全国の初等学校においてフィジー語およびフィジー・ヒンディー語をヴァナキュラー科目(vernacular subjects)として義務化し、1年生から8年生を対象

て標準ヒンディー語は、文化的資源であると同時に、職業要件でもある。

先日発表会があったということで、授業は、それぞれがヒンディー語で詩や短い童話を創作してデーヴァナーガリー文字で書いたポスターを見せながら読み上げる、または自分の好きな作家について自由に発表するというものであった。好きな文学作品にアミターブ・バッチャンの父親で詩人のハリヴァンシュラーイ・バッチャンの詩を挙げる者が多かった。どの学生も流暢にヒンディー語を話し、外見もインド人と変わらないため、インドの大学にいるような感覚を覚えた¹¹。日常会話ではフィジー・ヒンディ



自作の物語を披露する学生とサリター先生

ー語を使用しているためか、口頭発表は滑らかである一方、文字を読み上げる際にはややぎこちなさがあった。女子学生のなかには、動詞を男性形で用いる者もあり、フィジー・ヒンディー語の影響とみられる。しかし、彼らが発表で用いたヒンディー語は標準ヒンディー語であり、筆者がフィ

に会話的運用能力を重視したプログラムを導入する方針を示した。これはフィジー憲法第31条第3項の規定を履行するものであると説明された。

¹¹ 私語をする者がまったくなく、教師からの質問に自発的に手を挙げて発言する者がいないという消極的な性格は、インドとは異なる点であった。

ジー・ヒンディー語で話すよう促すと、学生たちは一様に恥ずかしがり、誰一人として語ろうとはしなかった。なお、ヒンディー語を学ぶ目的を尋ねたところ、自分たちのルーツの文化を次の世代に伝えるためとのことで、教師を目指す学生らしい模範的な回答であった。



フィジー・ヒンディー語関連書籍

フィジーのヒンディー語作家

今回の訪問にはフィジーのヒンディー語作家に会う目的もあった。フィジーにおけるヒンディー文学活動については Barz (1988)¹²や Khemendra

¹² Richard Barz, “Language Maintenance and Literary Use: The Case of Mauritian Bhojpuri, Sarnami and Fiji Hindi”, In R. K. Barz and J. Siegel (eds.), *Language Transplanted: The Development of Overseas Hindi*, Wiesbaden: O. Harrassowitz, 1988, pp. 197-220. フィジー文学活動については、pp. 210-214 参照。

K. Kumar and Subashni Lata Kumar (2022)¹³ がすでに論じており、**सुभाषिनी लता कुमार** (2021) は短編集を刊行し、寄稿した 16 名の作家の写真と略歴を紹介している。そのため、本稿ではこれらの詳細については省略する。フィジー文学のレジェンドである作家**सुब्रामनी** (सुब्रामनी)¹⁴ に会いたかったが、高齢でフィジーを離れて療養中とのことで、対面はかなわなかった。それでも、ラター氏¹⁵ に前もって依頼し、紹介を受けて、ラウトカとスヴァで作家活動を行う人たちに会うことができた。

ラウトカでは、大学での授業参観後に、地元の作家として三名が紹介された。すなわち、ヒンディー語で執筆を行うサリター・チャンド氏、その配偶者で同大学の音楽教員でもあり、ヒンディー語で小説や歌詞を執筆しているナレーシュ・チャンド氏、そしてラター氏の夫君で同大学の英語教員であるケーメンドラ・クマール氏である。三名はヒンディー語での著作があり、ラター氏が編集したフィジーのヒンディー語短編集に作品が収録されている。

執筆活動を行ってはいるものの、三名はいずれも大学教員であり、作家を生業としているわけではない。ラウトカのローカル・ライターたちは、ヒンディー語での執筆活動の将来性を総じて悲観していた。その根拠として挙げられたのは、ヒンディー語に限らず、フィジーでは本格的な書店がすでに姿を消し、文房具店の一角に教科書や補助教材が並ぶ程度になっているという出版・読書環境の変化である。加えて、かつて刊行されていたヒンディー語の週刊新聞が廃刊となったことも、状況を象徴する出来事として語られた。音楽教員であるナレーシュ・チャンド氏は、ヒンディー語で作詞した歌をラジオで放送した経験をもつが、聴衆が好むのは本国イン

¹³ Khemendra K. Kumar and Subashni Lata Kumar. “Roots and Routes: Tracing the Trends of Indo-Fijian Fiction”. *Journal of Migration Affairs*, Vol. IV(2), 2022, pp. 34-45.

¹⁴ 英語表記が Subramani であるため、日本語の学術書・論文では「スブラマニ」と表記されることが多い。本稿では、ヒンディー語の保持および語りの実践という文脈からこの作家を扱うため、本人がヒンディー語でデーヴァナーガリー文字を用いて記した綴りの音韻に基づき、語末長音を反映したカタカナ表記「スブラマニー」を用いる。

¹⁵ ラター氏をはじめフィジーのヒンディー語関連の大学教員の多くはスブラマニー教授の教え子であるという。

ドのボリウッド映画音楽であり、自作の楽曲はほとんど支持を得られなかったという。三名はいずれも執筆にあたっては मानक हिंदी、すなわち標準ヒンディー語を用いており、フィジー・ヒンディー語で書くことはない。「それならばインドで出版すれば売れるのではないか」と筆者が問いかけると、一様に驚いた表情を見せた点は印象的であった。その後、インドで出版しても、フィジーへの輸送費が高額であるため流通しないという、厳しい現実が語られた。ラウトカのローカル・ライターたちの思いから垣間見えたのは、教育と強く結びついた形で存在する標準ヒンディー語であった。

次に筆者は、約四時間かけてバスで首都スヴァに移動した。国際空港こそないものの、スヴァは首都だけあって、ラウトカに比べると明らかに都会的な印象を与える町であった。そこで、二名の女性作家に会うことができた。ウッター・クマリー・グルダヤール (उत्तरा कुमारी गुरुदयाल) 氏と、キラン・マラー・シン (किरण माला सिंह) 氏である¹⁶。

両氏とは Holiday Inn ホテルの一階カフェで会い、軽食を取りながら話した。ウッター・グルダヤール氏には、三冊の短編集、一冊の詩集、さらにギルミットの歴史を描いたノンフィクション作品一冊がある¹⁷。彼女はもともと小学校教員であったが、退職後に執筆を始め、これらの作品はいずれも自費出版によるものだという。ノンフィクション作品 महक (香り) は、契約労働者ギルミットがインドからフィジーへ渡り、サトウキビ農園でどのように働いたのかを、祖母が孫娘に語って聞かせる形式をとるもので、国立博物館に隣接する図書館の資料を調査して執筆され、教科書にも

¹⁶ 両女史との対面がかなったのは、大東文化大学の石田英明先生の尽力によるもので、この場を借りてお礼申し上げる。石田先生にフィジーのヒンディー語関連の知り合いを紹介してほしいとお願いしたところ、ローヒット・クマール・ハッピー氏を紹介されたが、彼はニュージーランド在住で、フィジーの知り合いを通じてフィジー在住の作家たちやヒンディー語愛好家のネットワークを構築するために WhatsApp アプリでグループを作ってくださった。そこでは、日本人のヒンディー研究者がスヴァに行くので、会える人は名乗り出てくださいといったメッセージが飛び交い、ウッター・グルダヤール氏とキラン・マラー氏が求めに応じてくださった。

¹⁷ 短編集 साहस, जीवन की मुस्कान, फुल्लसा प्यार का, 詩集 फ्रेन्जीपानी, ギルミットの歴史を描いた महक。

採用されているという。著者自身によれば、この作品はフィジーの学生たちにとっても好評とのことだった。たとえばインドのプリームチャンドの小説は、学生たちにとっては百年前のインドという遠い過去を描いた作品であり、必ずしも身近には感じられない。一方 *महक* では、自分たちの祖先の歴史をヒンディー語で学ぶことができる点に惹かれるのだという。彼女の詩集には、自然や日常生活といった主題が多くみられるのに対し、短編小説では、夫の不倫相手が親友であるといった設定や、LGBTQ を扱った作品（“साहस”や“लव ओल, रेस्पेक्ट ओल”など）があり、現代的な主題も取り上げられている。言語はいずれも標準ヒンディー語で、少ないがフィジー・ヒンディー語の単語が用いられることもある。女性を描いた作品が多い点は特徴的であるが、特定の主題に限定して執筆しているわけではないとのことであった。



フィジーのヒンディー語作家
（向かって左から）ウッターラー・クマーリー・グルダヤール氏と
キラン・マーラー・シン氏

キラン・マーラー・シン氏には、インドから出版された随筆集 *मुझे भी कुछ कहना है*（私も言わなければならない）がある。パンフレットのような装丁のカラー写真を含む小冊子で、ISBN や出版年の記載はなく、無料配布と

明記されている。本書は、スヴァのインド高等弁務官事務所¹⁸の支援を受けてインドで印刷され、フィジー国内で無償配布されたものである。内容は、「人生とは」「生きろ、生きさせてくれ」など、啓蒙的な主題を扱った随筆が、軽快な文体で綴られている。キラン・マーラー・シン氏も、ウッター・グルダヤール氏と同様、元教員である。

両氏との対話からは、ラウトカで感じられたヒンディー語やヒンディー文学活動に対する悲観的な雰囲気はほとんど感じられなかった。首都スヴァにはインドの高等弁務官事務所があり、ヒンディー語の普及活動が盛んであることが大きな理由なのかもしれない。頻繁にヒンディー語の催しがあり、出版助成もあるようで、ヒンディー語愛好家のグループは定期的に集まっているという。両氏はそのグループの仲間で、ウッター・グルダヤール氏は、「私たちににとって一番恵まれているのは、ヒンディー語で自費出版でき、ヒンディー語の活動に理解を示してくれる夫がいることよね」と明るく大笑いしていた。なお、軽食の前にキラン・マーラー・シン氏が祈りの言葉を捧げ、「アーメン」と結んだことから、両氏がキリスト教徒であることを知り、少なからず驚いた。彼女たちはヒンドゥーの家に生まれたが、夫君はキリスト教徒であったため、改宗したという。服装はサリーを着て額にティラクを付け、ヒンドゥーの祭礼にも参加する一方で、キリスト教徒として信仰生活を送っているという両氏の姿から、ここがインドではなくフィジーであることをあらためて認識した。

¹⁸ 高等弁務官事務所では、特にヒンディー語の普及のために派遣されているというイーシュワル・シン・ヤーダオ氏に大変お世話になった。ヒンディー語の普及のために、インドで出版されたヒンディー語の教科書を学校に配布したり、ヒンディー語の催しを開催しているという。高等弁務官のスニート・メーフター氏とも面談することができ、筆者が留学していたアーグラの出身であるとのことで、話しが盛り上がった。そこでは筆者がフィジーを訪れたことがフィジーのヒンディー語話者にとって大きな意味がある、この数日で彼らのヒンディー語が普段よりも標準ヒンディー語寄りになったと言われた。つまり、フィジーでは誰もが英語を使うことができるためヒンディー語は危機的状況にあり、ひとつの言語で通用する日本やフランスが羨ましいとも語っていたことは印象的であった。

フィジー・ヒンディー語

今回の訪問で、フィジー・ヒンディー語で書く作家に会うことはできなかった。フィジー・ヒンディー語で大部の小説 *डउका पुरान*（ダウカー・プラーナ）を著したスブラマニーに続く作家はいないようである。南インド出身であることが名前から分かるスブラマニーはヒンディー語話者の家系ではないそうだが、フィジー・ヒンディー語を記録として残す目的で小説を書き、大学教授であったため海外に行く機会に恵まれ、出版助成も容易に得られたのだとウッターラ・グルダヤール氏は語った。一方で彼女が作品でフィジー・ヒンディー語を使用しない理由は、「誰も喜ばないから」とのことだった¹⁹。地の文は標準ヒンディー語でも、会話のシーンではフィジー・ヒンディー語を使用する可能性について問うと、フィジー・ヒンディー語では破格の文法が許されるので「なんでもありだから」と価値を見出していない様子だった。

かつては新聞にフィジー・ヒンディー語による小さなコラム欄が存在していたようだが、それもすでに姿を消しており、現在ではフィジー・ヒンディー語による継続的な執筆活動や文学創作はほとんど行われていないようである。首都スヴァでフィジー・ヒンディー語の書籍を入手しようと Google Map 上で書店を探したものの、該当する店舗は確認できなかった。書店と思われた店が実際には小規模な文具店であったのだが、このことから、フィジー・ヒンディー語による出版・流通環境の厳しさがうかがえた。

最終日にインド系移民の歴史資料を国立博物館で見学した後にミュージアム・ショップで一冊のヒンディー語の本のタイトルを見つけた。それがスブラマニーの小説 *फ़ीजी माँ*（フィジーの母）であったことは、きわめて象徴的であった。666 頁の大部の小説で、全編フィジー・ヒンディー語で書かれている²⁰。以下に原文とそれに対応する標準ヒンディー語を作成

¹⁹ フィジーの人々が標準ヒンディー語を正式のものとしていることははっきりと感じられた。सुभाषिनी कुमार (2024: 42) によれば、一般にフィジーでは標準ヒンディー語が重要視され、フィジー・ヒンディー語は家庭や農場、市場やスポーツなどの場で使われる非公式な言語という。

²⁰ 初版は 2018 年で、South Pacific University の UPS Press から出版され 1026 ページであるが、筆者が入手したのは 2023 年の版で Carindale Publishing, Brisbane, Australia 出版によるものである。

し、日本語に翻訳してみた。昔話をしてほしいとしつこく頼まれて、「私」が話し始める場面である。

フィジー・ヒンディー語原文 (p.107) : कोन जाने केतना गड़ा मुरदा उखाड़े के पड़ी हम्मे। सब बात कहाँ खियाल रहे। अब कइसे बताई तीस चालिस साल के बात कि एक दिन रामफल के हिया अत्तवार के सबेरे रोट चढ़ा, हुंवा मुसई नाम के अदमी नारी के चरित्तर पे परकास डारिसा जोड़ जाड के, बनाय वनाय के बताय के पड़ी। संसार के देखो, थमा थोड़े रहे हरदम बने बिगड़े सही का है कोन जाने।

標準ヒンディー語 : कौन जाने कितने गड़े हुए मुर्दे उखाड़ने पड़ेंगे हमें। सब बात का कहाँ खयाल रहता है। अब यह कैसे बताया जाए तीस-चालीस साल की बातें कि एक दिन, रामफल के यहाँ, इतवार की सुबह, रोट चढ़ाया गया था, और वहाँ मुसई नाम के एक आदमी ने नारी के चरित्र पर प्रकाश डाला था। जोड़-जाड़कर, बना-वनाकर बताना पड़ेगा। संसार को देखो, थोड़े ही ठहरता, हर समय बनता-बिगड़ता है। सही क्या है, कौन जाने।

和訳 : いったい、私はどれほど多くの埋もれた死体(過去)を掘り起こさなければならぬのだろうか。すべてのことをどうして覚えていられようか。今さらどのように語ればよいのだろうか、三十年、四十年間の出来事を。ある日、ラームパルの家で、日曜の朝ローティーが供えられた。そこでムサイーという名の男が、女性の性質に注目した。断片をつなぎ合わせ、話を作り直して語るしかないだろう。世界を見てみなさい。世界は決して一定ではなく、常に作られ崩壊していく。何が真実なのか、誰に分かるのか。

कौन>कोन などの軽微な音韻変化は容易に推測できる。しかし動詞は標準ヒンディー語とかなり異なる。उखाड़े के पड़ी や बताय के पड़ी の के पड़ी は、Moag (1977: 211) によれば、すべての人称で用いられる義務・必然を含意する未来形である²¹。動詞の完了形が डाला ではなく 3 人称単数は डारिस となる²²のも、標準ヒンディー語とは異なる。ちなみに、ラームパルについてはラ

²¹ Moag (1977: 211)は、must speak/will have to speak として次の語形を挙げている : bole ke hoii/paRii。

²² Moag (1977: 209)では、boliis(spoke)となっており、それに従えば डारीस

一マ寺院の可能性も考えたが、おそらく個人名と思われる。語り手の「私」に関しては、フィジー・ヒンディー語では人称代名詞の *मैं* が 1 人称単数複数どちらでも使われるため、ここでは語り手自身を含む集合的な立場（フィジーの母）を含有していると解釈することもできる。

難解なこの文章こそが典型的なフィジー・ヒンディー語なのだろう。非常に読みにくいものの、リズムが良く、物語に引き込む力強い語り口調は、文学作品としての大きな魅力である。20 世紀初頭に北インドではヒンディー語の文体を整え、語彙の選定が行われた。植民地支配から独立した後のインドを見据えた国語を作り出す目的のもと、外来語や地方語などを排除して、純粹ヒンディー語を生み出そうという動きとなっていく。Orsini (2002: 380-383) はそれを、ヒンディー語が広範性を失う現象として議論している。スブラマニの用いたフィジー・ヒンディー語を読んだとき、標準ヒンディー語の文法が完成する以前のヒンディー語の口語とはこのようなものであったのではないか、20 世紀初頭にインドからフィジーに渡った人々が継承してきたフィジー・ヒンディー語にかつてのヒンディー語の広範性を垣間見る思いがした。

フィジーにおけるヒンディー語をとりまく環境

短い滞在ではあったが、本調査はヒンディー語について改めて考える契機となり、言語アイデンティティを再認識させるものであった。

ヒンディー語と現地のインド系住民の関わりについて今回は 3 点を確認することができた。第一に、ラウトカの Fiji National University では教育および就職のためのヒンディー語が教授されていること、第二に、スヴァでは二人の作家を通して自己表象としてのヒンディー語を確認できた。いずれも標準ヒンディー語によるもので、フィジー・ヒンディー語をアイデンティティの拠り所にする人はいなかった。インドから契約労働者として海を渡った祖先が、さまざまな地域やジャーティの人々どうしてコミュニケーションをとるために生み出されたフィジー・ヒンディー語を、現在

のはずだが、母音の長短を厳格に区別していないようである。आदमीが अदमीになるなどから推察できる現象である。

のフィジーのインド系住民は、インドの標準ヒンディー語よりも劣るものとして認識している。これが第三点目である。

第三点とも関わる言語アイデンティティもしくは言語による自己価値の向上という面で、筆者が宿泊したホテルの支配人（インド系女性）の話を記しておきたい。彼女は筆者が従業員たち（全員インド系）とヒンディー語で話しているのを聞いても、決してヒンディー語では話さなかった。ヒンディー語を理解していたが、話すのは苦手なのかもしれない。彼女は、自分がどのように以前のオーナーからこのホテルを買取ったのかといった身の上話を聞かせた後に、ホテルに滞在するインド人旅行者はヒンディー語が流暢でも英語能力は十分でない、発音にも問題があると述べ、フィジー英語の優位性と、それを使いこなす自らの能力の高さを強調していた。

インドでもビジネスや教育の場面では英語が優位にあるが、それは世界的にみられる現象であろう。フィジーのインド系住民のあいだでもヒンディー語から英語へのシフトがすすんでいることは、今回の観察から容易に推測できる。

その一方で、フィジーのインド系住民はインドの人々以上に敬虔で、そこにはヒンディー語が深く関与しているとも、スヴァのインド高等弁務官事務所にインドから派遣された職員たちは語っていた。トゥルシーダース

の著したヒンディー語版ラーマヤナ『ラームチャリットマーナス』を暗誦できる人たちがかなりいて、彼らは祖先の故郷の宗教や文化を大切にし、精神的拠り所になっているという。こうした宗教的基盤は、フィジーにおけるヒンデ



シャーンティ・トゥート紙 ディーワリー特集号

イー語の教育や制度的存続とも密接に関わっているようだ²³。また、ヒンディー語の新聞は廃刊になったとはいえ、英字新聞シャーンティ・ドゥート紙は、ディーワリーの祭りに合わせてヒンディー語による特集号を組んでいた。それは、ラクシュミー、サラスヴァティー、ガネーシャの華やかな表紙をめくると、17 ページにわたってヒンディー語の文章で埋め尽くされた折り込みであった。多くはこの祭りや女性の重要性をテーマとしたもので、ラター氏やヒンディー語作家グルダヤール氏のほかにも、多くの人々（その大半は女性）や小学生による文章が掲載されていた。スヴァのインド高等弁務官のスニート・メーフター氏とその事務所でヒンディー語の普及活動にあたっているイーシュワル・シン・ヤーダオ氏の文章もあり、インド高等弁務官事務所の関与のもとに成立したものと推測される。

これまでヒンディー語圏は主として北インドの文脈で捉えられてきた。インドのヒンディー語の伝播とそれによる文化圏の共有という観点から、隣接する南アジア諸国を一つの文化圏として見ることはあっても、インド洋を越えた太平洋の島フィジーがその枠組みで論じられることは極めて少なかった。今後は国際的にインドという国のプレゼンスが増すにつれて、地球規模で分布するヒンディー語圏を、言語文化圏として捉え直す動きが出てくるかもしれない。

なお、スブラマニーによる「祖先の言語を守る」実践については、先住フィジー人との間にある対立の構造を浮き彫りにしうることもあるかも

²³ フィジーのスヴァでは、高等弁務官事務所のヤーダオ氏から、ヒンドゥー教寺院にはサナータン・ダルムかアーリヤ・サマージのふたつの系統があることを教えられた。改革派のアーリヤ・サマージと区別するために伝統的なヒンドゥー教寺院はサナータン・ダルムとよばれるようである。सुभाषिणी कुमार (2024: 48) によると、南太平洋大学 (University of the South Pacific) のヒンディー語専攻は学生数の減少を理由に 2017 年からヒンディー語のプログラムは廃止するとの宣言を 2015 年に出し、サナータン・ダルムやアーリヤ・サマージなどの宗教団体やヒンディー語愛好者が激しく反対したという。結果として、インド系住民の間でヒンディー語に対する結束が強まり、アーリヤ・サマージ系の学校ではヒンディー語が必須となったという。また、南太平洋大学のヒンディー語のプログラムに対してはインド高等弁務官事務所が経済支援を行っている。

しれない²⁴。しかし本稿の関心は、そうした言語実践の価値や政治的意義を評価することにあるのではなく、インド系住民の人口構成が変化しつつある現在のフィジー社会において、彼ら自身がヒンディー語使用についてどのような言葉で語っているのかを記録する点にある。そのため、これらの実践に対する規範的評価は、今後の専門的研究に委ねたい。

参考文献

ヒンディー語教科書：

National Council of Educational Research and Training. 2024. *मल्हार*, New Delhi: राष्ट्रीय शैक्षिक अनुसंधान और प्रशिक्षण परिषद.

フィジー・ヒンディー語文法：

Moag, Rodney. A. 1977. *A Fiji Hindi – A Basic Course and Reference Grammar*, Canberra: Australian National University Press.

ヒンディー語一次文献：

सुब्रमनी. 2001. *डउका पुरान*, New Delhi: Star Publication.

— 2023. *फिजी माँ Mother of a Thousand*, Brisbane: Carindale Publishing.

गुरदयाल, उत्तरा कुमारी. (Uttra K Gurdalay)

— 2016. *महक*. Suva: Manata. ISBN 978-982-98147-1-5.

— 2016. *फ़ल्सफा प्यार का*. Suva: Manata. ISBN 978-982-98147-2-2.

— 2024. *जीवन की मुस्कान*. Suva: Manata. ISBN 978-982-101-678-0.

— 2024. *फ्रेन्जीपानी*. Suva: Manata. ISBN 978-982-101-676-6.

— 2024. *साहस – छोटी कहानियाँ*. Suva: Manata. ISBN 978-982-101-677-3.

सिंह, किरण माला. n.d. करन सिंह गुर्जर करुण ed., *मुझे भी कुछ कहना है*. हरिद्वार: भारतीय संस्कृति सेवार्थ न्यास.

²⁴ たとえば橋本(2003:171–173)は、政治理論・ナショナリズム・土地所有を軸とした構造分析から、スブラマニーのブルーリズムに批判的な評価を加えている。他方、小杉(2008:57)は、橋本のこうした理解を単線的であるとして再検討を求めている。

その他二次文献：

- Barz, Richard. 1988. "Language Maintenance and Literary Use: The Case of Mauritian Bhojpurī, Sarnami and Fiji Hindi", In R. K. Barz and J. Siegel (eds.), *Language Transplanted: The Development of Overseas Hindi*, Wiesbaden: O. Harrassowitz, pp. 197-220.
- 小杉世. 2008. 「フィジーにおける先住民とインド系移民：ポストコロニアルは民族ナショナリズムを超えられるか?」, 『ポストコロニアル・フォーメーションズⅢ：言語文化共同研究プロジェクト 2007』, 大阪大学大学院言語文化研究科, pp. 49-60.
- कुमार, सुभाषिनी लता. ed., 2021. *फ़ीजी की हिंदी कहानियाँ -इंद्रधनुष-*, नई दिल्ली: हिंदी बुक सेंटर.
- 2024. *फ़ीजी हिंदी साहित्यकार सुब्रमनी का हिंदी उपन्यास, मुँबई: प्रलेक प्रकाशन.*
- Kumar, Khemendra K. and Subashni Lata Kumar. 2022. "Roots and Routes: Tracing the Trends of Indo-Fijian Fiction". *Journal of Migration Affairs*, Vol. IV(2), pp. 34-45.
- 橋本和也. 2003. 「国民和解と国家再建 —フィジーにおける 2000 年クーデターをめぐる論争—」, 『オセアニアの国家統合と地域主義』 山本真鳥・須藤健一・吉田集而編, 国立民族学博物館 地域研究企画交流センター (JCAS)), pp. 161-187.
- Orsini, Francesca. 2002. *The Hindi Public Sphere 1920–1940: Language and Literature in the Age of Nationalism*, New Delhi: Oxford University Press.
- Siegel, Jeff. 1987. *Language contact in a plantation environment: a sociolinguistic history of Fiji*, Cambridge: New York: Cambridge University Press.
- 1988. "The development of Fiji Hindustani" In Richard K. Barz & Jeff Siegel (eds.), *Language Transplanted: The Development of Overseas Hindi*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, pp. 121–149.
- Yoneda, Nobuko. 2025. "Traces of Indian Ocean Trade in the Swahili Language" In Hiroko Nagasaki, So Yamane, Yutaka Kawasaki (eds.), *Currents of Metamorphosis across the Indian Ocean*, Kyoto and Vizianagaram: Kotoba Books, pp. 3-18.